

印度支那駐屯軍衛生兵手記

福井県 松 塚 喜代隆

昭和十七年四月十日、鯖江の歩兵第三百三十六連隊砲隊に入営するため兄と共に鯖江に向かった。営門前では腕時計を見ながら「もう少し、もう少し」と別れを惜しむ親子や夫婦の姿が多く見られた。「十一時までに入隊せよ」との指示だったが、早く入って少しでも慣れたほうがよいだろうと思い営門を潜った。

既に七、八名の初年兵が軍服に着替えていた。「松塚ですがどこでしょうか」と古年兵に尋ねた。「君は廊下から二番目だ、手箱に名前が貼つてある所だ。日用品は手箱に、襦袢などは着替えて今着てきた物はすべて付添人に持ち帰ってもらえ」兄は心配して見ていたが、私の衣類全部を風呂敷に包んで持ち帰った。軍隊生活の第一日が始まった。

夕食は新兵全員揃って赤飯の御馳走だ。一夜明けて

六時起床、営庭で点呼だ。素早い者、遅い者、服の釦の外れたままの者、中には下駄箱がわからず素足で並ぶ者もいる。私は七年間、丁稚奉公で覚えた洗濯、雑事等で一切他人に負けない自信があった。

お客様扱いも三日までで天下に名高い鯖江連隊の内務班教育が始まった。毎日の私物検査と整理整頓、班員の一人の不始末は直ちに全員整列ビンタ、対抗ビンタの連続である。

私は秘かに衛生兵になろうと決意していた。入隊して三カ月目に衛生兵の募集があり、早速、人事係に是非衛生兵になりたいと申し込んだ。試験の結果八八点でトップ合格となり、半年間の衛生兵教育が陸軍病院で始まった。

毎日、中隊医務室に集合、列を組んで病院へ通勤する。学科は、だんだん難しくなり、人体解剖や兎や犬を生きたまま麻酔をかけ解剖実験等、学ぶ事は山程で、時には化膿した外傷患者の治療で膿の出し方やガーゼの挿入方法など大切なことばかりだった。中隊に帰り点呼が済むと、厠に入り毎晩十一時まで勉強に励んだ。

その甲斐あつて卒業式には三十名中三番となった。今度は連隊医務室の庶務課勤務と決定。毎朝、中隊の患者を引率して内科は軍医の診察の助手になり、外科の患者にはガーゼの交換、注射などを施すことが私の任務だ。

昭和十八年六月のある日、軍医が「松塚、この通報を一度目を通しておけ」とバインダーを差し出した。

早速見ると、中部軍司令部発の命令であつた。「印度支那駐屯軍司令部軍医部へ衛生兵一名派遣せよ」。私はその場で軍医に是非行かせてくださいと懇願したら承知してくれ、二日後の夜の点呼時に週番士官からの転属命令が読み上げられ、班内の一同は驚いた。

人事係の計らいで自宅宿泊を許され、家族と一夜を過ごし、南方行きの心構えを固めることができた。豊橋の中部軍司令部に出頭し各地から選抜された下士官四、兵二十五、衛生兵一の計三十名の一団が結成され、六月二十五日宇品港で輸送船に乗船、僚船「安芸丸」と二隻で一路台湾高雄港に入港した。現地人が小舟に果物を積んで近付き、長い竿の先に籠を取付けバナナ

の一房を入れて甲板めがけて差し出し、「タバコ一個交換、ほまれ一個と交換」と叫んでいる。だれかがタバコを入れてやると、「ありがとう、ありがとう」と喜んでいた。

夜間航行を続けた船団はようやくマニラに入港したが、甲板から見た港は船首を上にしたもの、船尾を上になっているもの、横倒しになったもの、マストだけ出しているものなど、沈没船の墓場になっていたのには驚かされた。

港の埠頭には何百台ものポンコツ乗用車が見事に整列されていた。我々三十名は上陸して兵站宿舎に向かう途中、街路樹が美しく感ぜられたが、二階建ての学校が半分爆撃で破壊されており、戦場に來たんだと思つた。

上陸三日目の夜半「パンパン」と銃声が夜空に響くと、非常呼集がかかり一同は慣れない蚊張の中でウロウロするばかりだった。ゲリラの襲撃だったそうで、改めて敵地にいることを痛感した。街の映画館では「阿片戦争」と「マレーの虎ハリマ王」が上映されて

いた。

一週間過ぎて乗船、目的地サイゴンに向けて出航と思いきや毎朝エンジンはかかるが出航せず。不審に思いい船員に聞くと敵潜水艦出没の情報が入ったので待機中とのこと、安全第一に願う心はだれしも同じ。今度の船は捕獲船で一万五千トンの大きな客船でダンスホール、映画館、大食堂、ビリヤードもあり立派な船だがスピードはわずか六ノットで最低。乗客は私たち三十名だけ。

さぞ立派な客室で寝られると期待したら、とんでもない船倉の一番下の畳敷きの部屋だったのでがっかりしたが、一日も早くサイゴンに着きたい一心だった。

七月十五日ようやくマニラ出港、青黒い海は波が高く船酔いに苦しんだ。三日後突然ブザーが鳴り全員軍装甲板に集合の命令があり、軍装の上に救命具を着けたが、四〇センチの長さ、一八センチの太さの木片を六本紐でくくった物が救命具の代用品だった。

「敵潜だ！」戦友が右舷の先を指さしながら絶叫した。二百メートル先に潜水艦がポツカリ浮上し、ハッ

チを開けて兵士が二人、わが船を双眼鏡で眺めている。ほんの三、四分ほどで徐々に沈み、幸いなんのこともなく波間に消えていった。なぜ潜水艦が何もせず消えたのか船員に尋ねたら「この船に軍人さんが少ないからでしょう。それから海南島やサイゴンに無線で敵潜に遭遇せりと連絡したら、全速力で逃げてくれと返電があったよ。それにしても良かったよ」と笑顔で答えてくれた。

十日間を要してサイゴンに到着した私たちを軍司令部の衛兵隊長片山少尉が出迎えてくれて、「ここは中隊とちがい高級将校が多いから軍律は特に厳しいので心して勤務するように」との訓示があった。

一同はトラックに便乗してカラチ通りのドクター総督官邸前を通り、街外れの軍司令部に入り上官に申告、同僚にあいさつして勤務内容の説明を受けたが、今までと大した変わりはなく安心した。上官も同僚も一年近く前からサイゴンに来ているそうで内地の事をいろいろ尋ねられた。仏印は親日的で治安も良く、気候も日本と似ている所で住み良い。ただ蚊だけには注意が

必要で一年中蚊張が必要です。マラリアやテング熱の予防です。

昭和十八年十一月ころになると、敵のP 38やグラマンが低空で偵察に来るようになった。そのうち偵察回数が多くなるとともに、B 29の来襲があるようになった。また、ある日早朝の四時から夜十一時までグラマン機延べ二五〇機で港の埠頭や飛行場を重点的に襲撃し、飛行場の燃料がやられ、一晚中燃え続けボンボンとドラム缶の破裂音が鳴り響き凄い光景だった。

夜間B 29来襲のとき、軍司令部の屋根の上で電球を振り回す者が必ずいたとこのことで探したが不明のままだった。

昭和十九年の春にはインパール作戦が本格化して、日本から中年の召集兵たちが続々とサイゴンの兵站宿舎に入ってきた。この人たちは四、五日の休養の上、ブノンベンを経由して戦場に行くのだろう。一方ブノンベン經由でチフス、赤痢、マラリア、テング熱といった熱病患者が護送されてきたが、次に外傷患者もま

た続々と医務室に運ばれてきた。患者は着のみ着のままのボロボロの服で、靴は底はついていても足の指が外へ出るくらいの穴のあいた姿は乞食同然と言って過言ではないほどだった。

マラリア、テング熱の患者の外に足の化膿した患者が沢山いた。一カ月以上も入浴できず不潔が原因で、靴ズレ、虫刺されが化膿した例が多かった。皮下蜂下識炎は足の甲の骨だけがあつて、骨の下は膿で膿の中はウジ虫の巣同然だった。腐った臭いが鼻をつく中、ガーゼや脱脂綿で表面の膿を取り一〇〇ccの大注射器にリバノールの黄色い液を満たし骨の近くの肉を洗うと、ウジ虫が沢山流れ出てくる。これを二、三度実施してリバノールガーゼを傷口に挿入する。朝晩二回を二十日続けると、やっと傷の奥の方に肉の芽が生えてくる。「もう大丈夫だ」と患者を励まし治療に専念した。退院する者、新しく入院する者、入り乱れるうちに今度は海没者が入ってきた。

口にマスクした患者六名が車で来た。実は船が沈んで四時間浮いていたところを助けられたのだが、船か

ら流れ出た重油の火災で首から先が火傷でやられ、耳が焼かれて無くなった人や眉や鼻がただれている人ばかりだった。若い男の大切な顔面がこんなになって本当に気の毒だなあと思った。

現地人が働いている被服庫、兵器庫がB29にやられた時は救護班となって現場に行ったが、直径八メートルの爆撃の穴の中には足が一本また一本、片方には人肉の塊が転がっている。これらを袋やバケツに長い鋏で拾い集めるのを現地人がみつめていた。どんな気持ちで見ているのだろうか。

サイゴン勤務が一年余りになったが戦況の不利がはつきりしてきた。各地の司令官が入れ代わり、立ち代わり軍司令部へ打合せに来るようになった。突然、軍司令部が北部ハノイに転出することになり、先発隊として六十名が汽車で出発した。昼間は敵機の銃撃で避難することを繰り返しながら一週間でハノイに到着、早速宿舎の設定に走り回った。二十日後に、第二陣が到着したが医務関係は多忙になった。それはサイゴンに比べハノイの気候は厳しく、白昼は三四、五度と暑

く、夜は二四、五度と毛布の二枚くらい必要になるほど、風邪やマラリア、テング熱の患者が多発したからである。

患者の看護で多忙な私に、嬉しいことがあった。それはサイゴンでは当時、毎週二便連絡用の飛行機が内地に飛んでいたもので、私の眼鏡の取換え用を家に依頼してあったのがようやく届いたので。同時に兄が召集され北千島に居ること、また弟が舞鶴の海軍に入り、共に元気であることなどがわかった。

昭和二十年正月になり、在留邦人の家に招待され、御馳走になり楽しく一日を過ごした。邦人の診察治療に頼まれば出掛けていたので頼りにされていたからであった。

三月に入ると各方面から玉碎の報が入り、ますます戦況は不利となり、地元の新聞にも載るようになったので、親しい現地の人から「兵長さん（当時の階級）は医者だから私の街へ来るなら家も土地もまた娘も上げるからここに残りなさい。よく考えなさい」と誘ってくれた。

戦況の悪化は私の予想外だったし、軍隊生活も階級は兵長でも新兵は一人も入ってこないから、いつまでも最下級で初年兵と同じ仕事をやらせられている。四月に入ると内地の各都市が爆撃で焼け野原になったニュースが入ってきた。私の故郷の福井もやられたようである。ハノイに留まるべきか、日本に帰るべきか迷うようになったが、一度は親に会って親孝行をしたいと思いい、御厚意は有り難いがお断りしますと返答したが、娘さんが私から離れようとしなのにはまいった。だんだん疎遠にする外ないと思いい招待されても断るようになった。

昭和二十年八月十五日正午、司令部前に正装して集合せよとの命令で一同が天皇のラジオ放送を聞いた。司令官より軽率な行動は慎むようにとの訓示があったが、翌日から軍規は乱れ始め、自動車隊の三十名が衣類、食糧、兵器、弾薬を山積みにして奥地に向かったし、現地の女性と夫婦関係にあった者は女の家に入り込んでいった。

武装解除には中国の雲南軍が入ってきた。十人が乗

馬で先頭になり兵隊が後に続いている。靴はなくワラジ履きで鍋釜食器類を片方に、衣類は片方に天秤棒で担って来た。

食糧はすべて現品支給のため鍋釜が必要であり、夜寝るのは軒先の戸外だから布団が要るとのことに納得できた。大小便は戸外で出るがままするのが習慣だとのこと。

この大小便が原因かハノイでは、中国軍進駐直後からコレラが大流行して私たち軍医部はてんこ舞にさせられた。コロリ、コロリと簡単に死んでしまう。患者を運ぶたびに梅干の汁をコップ一杯飲んでコレラの感染を予防した。梅汁の酸性が一番良く効くからです。コレラがようやく下火になると、次いで武器の引渡しが始まったが、中国側から武器の使用ができるまで各種の教育委員を貸して欲しいと申し出があり、私も軍医一名、薬剤軍医一名と三名で北部仏印全部隊の医療器材の集積作業に取り掛かったが難事だった。他方、一般部隊はハノイから一二〇キロ離れた港町に捕虜収容所ができて、そちらに集結した。

九月に引揚船の第一便が海防（ハイフォン）港に入る予定に備え、乗船名簿の作成のため、ハノイの人々に別れを告げハイフォンに着いた。第一便は真っ白な船体の病院船だった。「松塚、世話になったな。有り難う、有り難う」の連続でどれだけ患者と手を握り合ったことだろう。病院船が遠く水平線の彼方に消えるまで見送った。

第二、第三、第四と続々帰国していったが、そこでも涙の別れが数多く見られた。

昭和十八年七月二十五日、サイゴンに上陸以来仕えた軍医部長も三代目の金原節三軍医大佐となり、私も衛生伍長となっていた。

昭和二十一年五月三日に名古屋港に復員、上陸し懐かしの我が家に軍服を脱いだが、兄の戦病死を知らされ涙が止まらなかった。遺骨箱には「小さじ」一杯の砂が入っているだけだった。

幾度か死線を越えて

フィリピン第一三八兵站病院

高知県 山崎 薫

大正十一年三月二十九日、現在の高知市五台山二〇一〇、農業を営んでいる家に生まれたが、軍隊に入るまでは役場で事務をしていた。昭和十七年徴集兵で高知連隊区での徴兵検査では第二乙種でした。その通知にはもう衛生兵と決められていた。五台山地区では同級生二十余人検査を受けたが、半分以上は現役（甲種、第一乙種）だった。当時は大東亜戦争に突入したので、皆お国のためという雰囲気張り切っていた。

召集は、昭和十八年六月一日で、私は青年学校で相当酷しい訓練を受けていたので自信はあった。父は海軍で第一次欧州大戦の青島攻略戦に参加し、勲章ももらっていて（当時海軍は五年間）、その後は千島列島の最北端の守占島を警備していたので、軍隊に入って